

きもの熱

札幌市医師会
おくしば眼科

奥芝 詩子

平成28年9月に、長年勤務した市立札幌病院の向かいでクリニックを開業させていただきました。網膜硝子体疾患の診断から治療までをできるだけお待たせせずに、をモットーにこの1年5ヵ月を何事もなく過ごすことができました。これもひとえに北海道医師会の皆様のおかげと深く感謝しております。誌面を借りてお礼申し上げます。

さて、何か原稿を書いてください、とのご依頼、無趣味の私は困ってしまいましたが、着物について書いてみようと思います。

お茶を教えていた母が64歳の若さで亡くなり、たくさん着物が残されました。どうかしなければと思いつつ、医業、子育てなどに忙殺され、10数年間そのままになっていました。そんな中、7年前に姪がドイツのコーブルクという小都市で結婚式を挙げることになり、母親にぜひ着物で出席してほしいと希望。何とか義妹に着物を着せたいと、着付けを2回習い、どうか着付けができるようになりました（人間、必死だと結果が出るものですね）。日本人が全くいないドイツの小都市で着付けの良しあしも分かるまいと、ずうずうしく私も着物で参加しました。ここからが私のきものフィーバーの始まりでした！

母や私たち娘用の着物、帯、小物（帯締め、帯揚げ）をどうにか組み合わせ、着付けの練習、どうにか着れたらそのままおでかけです。食事会、買い物、同窓会、映画、忘年会など、どこでも着物で行きました。着物と帯の写真を分厚いアルバムに整理し、いろいろな呉服屋さんに行っては、分からないものにつき質問攻め。和装雑誌、きものブログを見ては、知識を増やしていきました。

だんだん着なれてくると、サイズが合わないまま着ていた母の着物を直したくなり、悉皆屋さんをお願いし、少しずつ私のサイズに直していき、羽織を流行りの長い丈に直してもらったり、羽織裏を新しいものに替えてもらったりと、たいへんな散財です。学会で銀座や京都に行くと、必ず1件は呉服屋さんや和装小物のお店に立ち寄ってしまい、つついとお買い物。ついにお世話になる呉服さんが決まっただけからは、着物や帯にさらなる散財をしてしまいました。

ご縁があつて、茶道を始めるようになってからは、お稽古前に病院から家に急いで帰り、着物に着替えてからお稽古に行きました。お茶事など着物を着る

機会が多く、楽しく着物ライフを送っていました。

しかし、このきもの熱はだんだんと冷めていくものようです。開業前後の忙しさもあり、何が何でも着物を着たい、という熱気はなくなっていき、このごろは必要があれば着る、という程度に落ち着いています。

着物を着るようになって分かったことは、日本の染色、織物、刺繍などの文化が素晴らしいということです。だんだん継承する人がいなくなっているものもあり、残念です。今の日本では、着物は成人式や結婚式などの時に着る特別なもの、という感じで、着物を着て歩いていると、視線を感じることも多々あります。でも素晴らしい日本の衣装なのだから、廃れることなく残ってほしいなと願っています。もし医師会の会合で着物姿の私を見かけても、変なヤツと思わないでください。



東京の五島美術館でのお茶会に、お茶の先生のご家族、姉弟子の方たちと共に参加した時の写真。素晴らしい美術館のお茶室、満開の桜など一生の思い出になりました。（左から3人目が私です）



歌舞伎座の九月柿落公演観劇の時の写真。贅沢な配役のため、チケットを取るのがたいへんでした。家で明け方から着物を着て、朝の便に乗って銀座へ向いました。（きもの熱は病です）